レミリア・スカーレットの日常談

SESERAGI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レミリア・スカーレットの日常談

【Ｎコード】
Ｎ５３８０Ｙ

【作者名】
ＳＥＳＥＲＡＧＩ

【あらすじ】
一枚の写真からレミリアの悲しい過去がよみがえる。レミリアとフランの両親が登場する感動的物語り。今こそレミリアの紅魔館の主になるまでの過去があかされる。

（前書き）

初めまして作者のＳＥＳＥＲＡＧＩと言います。長文で失礼します。この度はこのページを見て頂きありがとうございます。この小説では幻想郷のキャラクターが登場する物語りとなっております。タイトルの通り（レミリア・スカーレット）と言う東方紅魔郷のキャラクターで紅魔館の主でもある彼女がメインで物語りを書いていきます。この小説を読む際の注意事項。この物語りは原作にあるキャラクターを使用させて戴いてます。読まれる方で原作とキャラクターの、言動、行動、性格、その他が違うと思われる方がいると思います。お手数ですが、読んでいて不愉快に思われる方、キャラクター崩壊を起こしそうになる方はこの小説を読むのを中断して下さい。私作者の方も読まれる方が満足して貰う様、敬意を持って書かせて頂きます。それでは私、幻想郷、作者オリジナル小説を楽しみ下さい。

（紅魔館の主）

作者ＳＥＳＥＲＡＧＩ

登場人物

レミリア・スカーレット
この物語りの主人公的存在。物語りに出る紅魔館の主で吸血鬼。少女の姿をしてるが何百年と生きてる。

フランドール・スカーレット
レミリア・スカーレットの妹で吸血鬼。何を考えてるか分からない破壊的行動を取る。見た目は姉のレミリアと同じく少女だが何百年と生きてる。レミリアと父親と母親にフランと呼ばれてる。

十六夜　咲夜
物語りに出る紅魔館のメイド長。レミリアに尽くす２０代位の女性。

四季映姫・ヤマザナドゥ
東方の幻想郷の全ての死者に裁きを与える裁判長。少女の姿をしてる。

小野塚　小町
東方の幻想郷の全ての死者をあの世に連れていく死神。２０代位の女性に見える。仕事をサボり映姫からたっぷりお説教を受ける時が

ある。

ここからは作者オリジナルキャラクターです
。

レミリアとフランの父親
原作には存在しないキャラクター。この物語りでは紅魔館の初代の主で吸血鬼。

レミリアとフランの母親
原作には存在しないキャラクター。この物語りではその名の通りレミリアとフランの母親で吸血鬼。

それでは物語りをお楽しみ下さい。

この物語りは紅魔館の主である、レミリア・スカーレットが紅魔館の主になる前のお話。

空は青く日差しの当たる紅魔館。紅魔館の時計は１０時を指してる。
紅魔館の主のレミリア・スカーレットの部屋でレミリアは一人椅子に座って紅茶を飲んでいる。
暫く紅茶を飲んでいるとドアを叩く音がした。
「お嬢様、咲夜です。」咲夜の声だ。
「入りなさい。」返事を返すレミリア。
咲夜が部屋に入って来た。
「お嬢様、先程物置の掃除をしていましたらこの様な物が。」咲夜

がレミリアにその物を見せた。
それは木の額縁に入った、レミリアと、羽がレミリアと同じフランと、二人の男女が写った写真が入ってる。
「あら、まだそんな古い写真が物置にあったのね」レミリアが咲夜に言う。
「お嬢様とフランドールお嬢様が写ってますね。左右に写っている人は誰なんですか？」咲夜がレミリアに聞く。
「・・・私にとって一番に大事な人よ。」レミリアが言う。
「教えて頂いても宜しいですか？」咲夜が言う。
レミリアは考えてる。考え終え咲夜の方を向く。
「・・・。そうね貴方には話しても良いかもね。」レミリアが咲夜に言う。
レミリアは写真を見る。
「その写真の左右に写っている人は私のお父様とお母様よ。」レミリアが言う。
「そうですか。お嬢様とフランドールお嬢様の・・ですが、私は初めて見ますね。」咲夜が言う。
「そうね、その頃はまだ貴方は生まれて無い時だからね」レミリアは言うと天井を見た。

「私のお父様がまだこの紅魔館の主だった頃・・・・・・。」
４５０年前の紅魔館。
「お姉様だけずるーい。」フランがレミリアの持つぬいぐるみを見て言う。
母親がフランの方に行く。
「フランそんな事を言わないの、貴方にも同じ物をあげたでしょ」母親がフランに言う。
「だって直ぐ壊れるんだもん。」フランが母親に言う。
「フラン、それは貴方の力が強すぎるからよ」レミリアがフランに言う。
「ぶー」フランが言う。
奥から父親が出て来た。
「ははは、フランは焼きもちを焼いてるのかな」父親が笑いながらフランに言う。
フランが父親の方に行く。
「パパ、また新しいのを買って。」フランが父親に言う。
「そうだな。」父親が言う。
「貴方！甘やかしたらいけませんよ。」母親が夫に言う。
「いやー、娘に言われると弱いな私も。」父親が笑いながら言う。

隅の方でレミリアがため息をする。
「フランったら。」レミリアが小声で言う。
ボーン！ボーン！呼び鈴が鳴る。
すると奥から咲夜にそっくりなメイドが出て来た。
「小野塚小町様が来ております。」メイドが父親に言う。
「死神が！？」父親が言う。
父親は部屋を出て客室に行く。客室のドアを開けた小町が椅子に座っている。レミリア達の父親も座る。
「死神が私に何か様かな？」レミリア達の父親が小町に言う。
「四季映姫様からの裁判のお知らせを。」小町が言う。
「閻魔が！？だが私はまだ死んではいないぞ、一体何を裁こうと言うんだ？。」レミリア達の父親が小町に言う。
「いいえ、此は此から貴殿方夫妻に起きるべき裁判です。」小町が言う。
「・・・私と妻だと……。」レミリア達の父親は深刻な顔になった。
「・・・。死神、閻魔に伝えとけ私達は死なないとな。」小町に言う。
「運命は変えられません。すでにあたいには貴方の最期が見えております。」感情の感じられない声で小町が言う。

「ふざけるな！何が最期だ！いい加減も大概にせんと摘まみ出すぞ！」レミリア達の父親は小町に怒鳴る。

「四季映姫様の意見は変えられません。貴殿方夫妻は４日後、病に寄ってこの世を去ります。その時にまた・・・。」小町は客室を出た。

父親は顔から大量の冷や汗が出てる。

「４日後だと・・・。」父親は心の中で言った。

自分の部屋に戻り深刻な顔で悩んでる。「妻にもこの事を伝えねば。レミリア達には何て言えば良いんだ……。」父親が言う。

メイドを呼び妻を呼ぶ様にメイドに言う。暫くすると妻が来た。

「貴方、どうしたんですか？あぁそうフランったら貴方がまた新しいのを買って貰えると思ってワクワクしてましたよ。」妻が夫に言う。

「・・・・・驚かずに聞いてくれ。先程死神が来たな。それで私ら夫婦の命は後４日しか無いと言い残して帰った」真剣な顔で夫が妻に言う。

「！！！……」妻は驚いて言葉が止まってしまった。

「……フラン達にはその事は？」夫に聞く。

「言える訳が無いだろう、レミリアならともかくフランならこの事を聞いたら何を仕出かすか…。」夫が妻に言う。

「でも何も言わないというのも・・・」夫に言う。

「・・・・・」夫は黙ったまま暫く考えていた。

「レミリア達にこの事を言おう。」夫が言う。

妻が悲しい顔になった。

「・・・これで紅魔館も終わってしまうんですね……。」妻が夫に言う。

「その事については考えてある私達が亡くなっても、この紅魔館の後継ぎを。」夫が言う。

「それは?」妻が聞く。

「それはレミリア達が来た時に言う・・・・。メイドと門番と図書館長と司書にもこの事は言う…。」夫は妻に言った。

メイドを呼び皆を大広間に呼ぶ様に言った。暫くすると皆が大広間に集まった。レミリアとフランも来た。

父親が前に立つ。

「……皆聞いてくれ、さっき死神が私の所に来て私達夫婦の命は後、4日しか無いと言った。だが、けしてこの事に付いては今更何も言う事は無い。」父親が皆に言う。

「……そんな事……」レミリアとフランはその場で固まってしまった。周りの皆も、皆が一成に静まりかえった。

!!!。フランが走った。だがそれをレミリアが止めた。

「何するの！お姉様、今から閻魔達を破壊しに行くんだから！」フランが言う。

「そんな事をしたらどうなるか分かってるの！」レミリアが言う。

「お姉様だって同じ気持ちの筈よ！それともお姉様は何とも思わないわけ！！」

パシーン！！！。

その音だけが大広間に響いた。レミリアはフランを叩いた、５０年生きてる中でこの様な形で叩いたのは此が初めてかも知れない。

「思わない訳がないでしょ！」レミリアの目から涙が出てる。

レミリアは大広間から出て行ってしまった。

フランも涙が出ている。それは叩かれた痛さでは無く別の意味でだ。

咲夜にそっくりなメイドがフランの側に行ったがフランも大広間を出て行ってしまった。

父親は二人が出て行った方を見る。

「すまない……。」父親が心の中で言った。

咲夜にそっくりなメイドが父親の前に来た。

「ですが旦那様、旦那様方がいなくなられたらこの先のこの紅魔館の主はどうなるのでしょうか」咲夜にそっくりなメイドが父親に言う。

「その事は既に考えてある。」父親はそれを言って口を閉じた。

レミリアの部屋でレミリアはベッドの所で一人泣いていた。５０年生きてこれ程泣いたのはこれも初めてかも知れない。

「私達のお父様とお母様が……。」レミリアが言う。

レミリアは涙を拭いた。

「フランに後で謝らないと……」父親達の事も深く考えていたがフランの事も考えていた。

「やけを起こさなければ良いけど。」レミリアは言う。

フランの部屋でフランは一人机に座って泣いていた。

「お姉様の馬鹿……」フランは心の中でそう言う。

フランにとってレミリアは心底親っている。時には一緒にふざけたり、笑ったりしたり。だが今のフランにはそれが見えていない。

「謝って来るまで絶対に口を聞かないから。」フランが言う。

空は暗し満月が出る。紅魔館の時計は夜１２時になろうとしている。夜は明け朝が来た。本来なら皆でにぎあう食堂も今は咲夜にそっくりなメイドしかいない。

「食事をとれる時ではありませんよね・・・」咲夜にそっくりなメイドが言う。

父親の部屋で父親は一人椅子に座って悩んでいた。

「まずいな、このままでは紅魔館の後継ぎどころかレミリアとフランの仲まで引き裂いてしまうかも知れない……。」父親は深く悩んでいた。

暫く考えていると1つのアイデアが浮かんだ。

「そうだ！」父親は立ち上がった。

フランの部屋でフランは机に座ったまま寝ていた。

母親が起こす。

「フラン」フランは目をさます。

「ママ」フランが言う。

「フランこんな所で寝ていたら風邪を引いてしまうわよ。」母親がフランに言う。

「はーい。」フランが言う。

母親は部屋を出た。

フランは母親の出て行った方を見る。

フランはまだ両親の事を理解していない、理解したくもない。

フランはそんな事を思ってた。

「フラン」母親の声ではない。レミリアの声だ。

「……」フランは黙っていた。

「黙っていれば入って来ないでしょ。もし入って来ても私の弾幕で追い払ってやるわ。」フランが言う。

「ガチャ。」扉が開いた音がする。

「本当に入って来るなんて……」フランは体から煙が出てる。

「お姉様だろうと来るなら来なさい……」フランがレミリアの来る方を見て言う。

「フラン、これ・・・。」レミリアの声がする。

レミリアの影が見えて来た。

「来たわね!。スターボウ・・・・!」フランは動きが止まる。

「それは・・・。」フランがレミリアの抱いてるそれを見た。

「貴方にあげるわ。」レミリアがフランに言う。

「お姉様。」フランがレミリアに言う。

それはレミリアが一番に大切にしているぬいぐるみだ。フランが「さわらして」って言っても絶対にさわらしてくれないぬいぐるみをレミリアから受け取った。

「叩いたりしてごめんね。」レミリアがフランに言う。

フランは目から涙が出て来た。

「・・・・お姉様、私こそごめんなさい、何も思ってないなんて言って。」フランがレミリアに言う。

部屋の扉から母親が二人の声をそっと聞いていた。

「奥様。」咲夜にそっくりなメイドがレミリア達の母親に言う。

「旦那様がお呼びです。」咲夜にそっくりなメイドが言う。

母親は夫のいる部屋に行った。

「貴方どうしたの？」妻が夫に聞く。

「うちら親子の写真を撮ろうと思ってね。」夫が言う。

「写真ですか。」妻が言う。

「うむ、写真をね・・だが1つ困った事があってね。レミリアとフラン何だが・・・」っと妻が。

「あの子達なら仲直りしましたよ。」妻が言う。

「本当か！」夫は喜んだ声で言う。

「よし、早速メイドに写真機を持って来て貰おう。お前は二人を連れて来なさい。」夫が言うと妻は部屋を出た。

暫くすると妻とレミリアとフランが来た。

「パパ、私写真撮られるのやだ！」フランが父親に言う。

「ははは、そうかフランは写真を撮られると言う機会が余り無いからな。大丈夫だ写真映りを気にしてるならメイドが綺麗に撮ってくれるよ。」父親がフランに言う。

「それでは良いですか？」咲夜にそっくりなメイドが皆に言う。

前の椅子にレミリアとフランを座らせフランの方に母親をレミリアの方に父親が立った。

「よし。撮ってくれ」父親が言う。

「カシャン」

暫くすると写真機から写真が出て来た。皆は写真を見る。

「おー綺麗に撮れたじゃないか。」父親が言う。

「本当ですね。」母親が言う。

「綺麗に撮れたわね」レミリアが言う。

「綺麗に撮れてる方なの？」フランが言う。

父親が咲夜にそっくりなメイドに写真を渡しそれを額縁に入れる様に言った。直ぐにメイドは写真を持って行った。

「さぁ、写真も撮った事だし皆にまた大広間に集まって貰おう。新しい紅魔館の後継ぎを・・・・・」父親は目眩が起きた。

「バタン！」父親は倒れた。

「貴方！！」「お父様！！」「パパ！！」皆が父親に叫んだ。

「・・ぐっ、まだ４日は経ってないのに……」苦しい声で父親が言う。

すると扉から小町が入って来た。

「そろそろかと思い来て見ましたが、やはり旦那様の方が先でしたか。」小町が言う。

「あんた！パパを苦しめるなー！！」フランが小町に飛び掛かろうとしたがレミリアに止められた。

「フラン！」レミリアが言う。

「あらあら残念ですね。あたいに傷を負わせれば、フランドール！貴方も両親達と一緒に連れて行ってあげたものを。」小町が言う。

レミリアは小町を見る。

「こいつ・・・。」レミリアが心の中で言う。

「まぁいいです。父親は倒れましたが両親共に４日間と言うのは変わら無いからね。後、２日間親子の思い出でも作ると良いですよ。」そう言って小町は部屋を出た。

夫妻寝室の父親のベッドで父親は横になってる。
隣にはいつ自分もこの様な事になるか分からない母親がいる。少し後ろでレミリアとフランも父親を見ている。
「・・・もう遅いから二人共寝なさい。」母親がレミリアとフランに言う。
「おやすみ」。「おやすみなさい」レミリアとフランは部屋を出た。
紅魔館の時計は夜1時を指してる。
レミリアとフランは眠る事が出来なかった。
「・・・後2日、いえ1日」レミリアが時計を見て言う。
夜は明け朝が来た。今日は大雨が降っている。
レミリアが夫妻寝室に行くと母親も父親と同じく横になってる。顔は苦しそうな表情をしてる。
「……。」レミリアはただ黙って見てるしか出来なかった。
暫くするとフランも入って来た。
「……。」フランも黙っている。
二人は寝室を出た。
「レミリアお嬢様。」咲夜にそっくりなメイドが言う。

「何かしら？」レミリアが言う。

「写真を額縁に入れましたがどうでしょうか？」メイドがレミリアに言う。

レミリアとフランは額縁を見た。

「ええ、悪くは無いわ、此は夫妻寝室の方に持って行って貰えるかしら。」レミリアが言うとメイドは額縁を持って夫妻寝室の方に行った。

「フラン、ついに後、1日になってしまったわね・・・。」レミリアがフランに言う。

フランが悔しそうな顔をする。

「闇魔達、きっとこの状況を影で見て笑ってる筈よ！」フランが言う。

「よしなさいフラン、今は闇魔達に怒りをぶつけても仕方ないわ・・・。」レミリアがフランに言う。

「こうでも言わないとフランの事だから何をするか・・・。」レミリアは心の中で言った。

本当は今すぐにでも闇魔達の所に行きたいのはレミリアだって同じ思いだった。だが私達が行って両親達がそれを喜ぶ筈がない。

二人はそれぞれの部屋に戻った。

レミリアの部屋でレミリアは時計を見てる。
「ついに後、１日……。」レミリアが言う。
フランの部屋。
「あの死神、明日来たら覚えてなさい！。」フランが言う。
紅魔館の時計は１０時を指してる。
レミリアの部屋でレミリアはメイドを呼んだ。
「はい、お嬢様なんでしょうか？」咲夜にそっくりなメイドが言う。
「明日、１２時に紅魔館の鐘を鳴る様にして貰えないかしら。」レミリアがメイドに言う。
「はい、ですがどうしてですか？」メイドが聞く。
「両親達が言ってたの二人に何かあった時に鐘を鳴らす様にって。内容は私も分からないわ。」レミリアがメイドに言う。
「分かりました。」メイドは部屋を出た。
レミリアは部屋の窓から空を見た。朝の雨は止み満月が出てる。
「お父様、お母様……。」レミリアが言う。
日は変わり最終日が来た。

レミリアとフランと咲夜にそっくりなメイドと皆が夫妻寝室に集まってる。

「お父様、お母様。」「パパ、ママ。」「旦那様、奥様」。「旦那様方。」皆が言う。

「カチ、カチ。」時計の音だけが寝室に聞こえる。

「・・レ・ミリ・・・ア、フ・・ラン・・」父親が二人を呼んだ。

皆は両親のベッドの前に行った。

レミリアとフランは父親を見る。

「・・・レミ・・リア・・フラ・・・ン・・おまえ・・たちは・・・わ・たし・・のたから・・だ・ほんと・・う・・・にありが・・とう。・・レミリ・・ア・これか・・らはお・まえ・・が紅魔・・・館の・・主になるんだ・・そして・・みんなを・・・た・の・ん・だ・ぞ」父親は微笑んで目を瞑った。

レミリアとフランは目から涙を出し頷いた。

「・・・レミリア・・フラン・・」母親の声だ。

レミリアとフランは母親の方を見る。

「・・ふ・たり・・とも・・もっと・・・あなたた・・ちの・・・まえにい・・てあげ・・たかった・・・けど・・ごめ・んな・・さいあ・・・なたた・・ちは・わたしたち・・のさいこうの・・むす

めよ・・・だか・・ら・これから・・も・ふたりなか・・・よくし・・てね・レミリア・・フラン・・・あ・り・が・と・う・・・。」母親も微笑んで目を瞑った。

時計の針が１２時を指した。

「ガーン！！ガーン！！」紅魔館の鐘の音が響き渡る。

咲夜にそっくりなメイドが両親の脈を触る。メイドはレミリアとフランの方を向いて首を横にふった。

「お父様！！お母様！！」「パパ！！ママ！！」二人は両親の体を揺すった。

レミリアとフランの涙が両親達に当たる。

レミリアとフランは大量の涙を流す。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」レミリアとフランは泣いた。周りにいる全ての者達が泣いた。

夫妻寝室は紅魔館の皆の泣く声だけが響く。

すると寝室の扉から小町が入って来た。

「悲しんでるところ悪いね、二人を貰いにきたよ。」小町が言う。

フランが小町の前に立つ。

「お前何か私の本気の弾幕で消してやるー！！」フランが言うと体

から煙が出てる。

「スター・・・」言い終える前にレミリアに直ぐ捕まれた。

「フランやめなさい！！」レミリアがフランに言う。

「なんで止めるのお姉様！こんな奴ここで私に消されるべきよ！！」フランが涙を流しながら言う。レミリアも涙を流しながらフランを掴む。

「聞きましたよ今の言葉、貴方も私の裁判を受けたい見たいですね。」聞き覚えのある声だ。

「映姫様。」小町が言う。

「小町、スカーレット夫妻を連れて来なさいと言ったのにいつまでかかっているのですか？。」映姫が言う。

「すいません、只今。」小町がレミリア達の両親の方へ行く。

フランが拒む。

「パパとママを連れて行くなー！！」フランが言う。

映姫はため息をした。

「フランドールスカーレットそれは出来ません。死者を裁かなければいけませんから。どうしてもと言うのであれば貴方も両親と一緒に裁判を受けますか。」映姫がフランに言う。

フランは煙が出る体で映姫を見る。

「出来る物ならやってみなよ……。」フランが言う。

レミリアが止めに入る。

「フラン！両親の思いを無にするつもり、頭に来てるのは私も一緒よ！。」レミリアが映姫を見て言う。

「今の言葉しっかり聞きましたよ。以後、貴方達がこの先に私の裁判を受ける時が来たら罰を考えておきます。」映姫はレミリアとフランに言った。

小町はスカーレット夫妻を棺桶に入れて運んで行った。

最後に映姫がレミリア達の方を向く。

「スカーレット夫妻の裁判は明日行います。私がくだす判決はもう分かっていると思いますが。では次は裁判所で会いましょう。」映姫は部屋を出た。

フランがレミリアの方に来て泣いた。

「ゆるせない。絶対にゆるせない！。明日、裁判所を破壊してやるわ！！」フランが言う。

「それは・・明日の閻魔の判決によるわ。フラン貴方だけ悲しい思いはさせないわ。」レミリアが言う。

レミリアもフランと同じ思いを持っていた。閻魔がレミリア達の両

親を地獄に落とすのならレミリアは閻魔を容赦なく消すと。

夜はあけた。

紅魔館の皆は裁判所の前にいる。フランは着いた途端に破壊しようとしたがレミリアが断固してそれを止めた。

裁判所の時計は9時になろうとしてる。

「皆、行くわよ。フラン、私が良いって言うまでは何も破壊したら駄目よ。」レミリアが言う。

フランは頷く。

紅魔館の皆は法廷の傍聴席に座った。

裁判は始まった。

「スカーレット夫妻前に出なさい。」映姫が言う。

レミリア達の両親は前に出る。

「貴方達は少し永く生きすぎた、それに自分達ならまだしも貴方達は二人の子孫を残してしまった。そう強大な力を持つ貴方達がさらにまたその力を受け継ぐ者をふやしたと言う事です。」映姫が言う。

傍聴席でフランがレミリアを見る。

「お姉様！こんな話は聞いていられないわ！。早く破壊しなさい！って言って！」フランがレミリアに言う。

「いいえ、フラン待つのよ。閻魔が判決を言い終えるまでは。」レミリアが言う。

映姫はレミリア達の両親を見る。

「私の判決はもう分かっていると思いますが、言わせて貰います。」映姫は言う。

「良いフラン、閻魔が地獄行きと言ったら好き放題破壊しなさい！」レミリアが言う。

「分かったわ！」フランが言う。

「それでは、貴方達の判決を黒と白で言わせて貰います。貴方達の判決は・・・・・・。」

皆は黙った。

「白です。」

レミリアとフランと皆は驚いた。

「・・・今、白と言ったよね。」フランが言う。

「ええ、白と言ったわ」レミリアが言う。

フランは映姫の方へ走った。

「フラン！駄目よ！」レミリアが追う。

フランが映姫の前に立った。

「どうして！？、裁判で絶対に白とは言わないあんたが・・・」フランが言う。

「フランドールスカーレット！今は開廷中です。傍聴人の異議は閉廷後に聞きますので早く戻りなさい！。」映姫が言う。

レミリアがフランの方に着いた。

「フラン、閻魔の言う通りよ。今は戻りましょう。」レミリアがフランに言う。

フランは両親の方に走った。

フランは両親を抱く。

「パパ、ママ。もう一度戻って来て。」涙を流しフランが両親に言う。

「……。」両親には言葉が通じてない。

小町がフランを掴んだ。

「フランドール！彼等は魂になっているんだ！あんたの声は両親には聞こえてないよ！。早く戻らないとあたいが映姫様に変わって・・・」小町が言い終える前に。

「小町！今すぐフランドールスカーレットから手を離しなさい！」映姫が言う。

小町が手を離す。

「どうしてですか。」小町が言う。

「小町、貴方もスカーレット夫妻を見るんです。」映姫が言う。

小町はフランのいる方、スカーレット夫妻の方を見た。

「！！！。そんな事は有り得ないよ」小町がスカーレット夫妻を見て言う。

レミリア達の両親はフランの肩に手を置いた。

「パパ、ママ。」フランが言う。

映姫はこの場面に驚いた。

「奇跡です。魂だけになって感情の無い者が・・・。」映姫が言う。

レミリアも両親達の方に行く。

「お父様、お母様。」レミリアが言う。

両親は微笑だ。

レミリアがフランの頭をなぜる。

「フラン、戻るわよ。」レミリアが言う。

レミリアとフランは席に戻った。

映姫が小町を向く。

「小町、後で私と一緒に来なさい。」映姫が小町に言う。

小町は頷いた。

映姫はスカーレット夫妻を見る。

「貴方達の思いは私にも伝わりました。レミリアスカーレットとフランドールスカーレットに対するその優しさを。もう私から言う事は何もありません。」映姫が言う。

「本日の裁判は閉廷します。」映姫が言う。

映姫と小町はレミリア達の方に行く。

「レミリアスカーレットとフランドールスカーレット」映姫が言う。

レミリアが映姫達の方を向く。

「閻魔、1つだけ教えて欲しい事があるわ。何で判決を白と言ったの？」レミリアが聞く。

映姫は微笑んだ。

「それは、貴方達の方が一番に分かると思いますよ」映姫が言う。

映姫は法廷を出た。

小町がフランの方に行く。
「フランドール、あたいは1つ教えられた事があったよ。あんたの思いが魂だけになってる両親に奇跡を与えたと言う事を・・・。それにあんたに酷い事を言った事を謝るよ。レミリアあんたも。あと貴方達の両親にも。」小町が言う。

レミリアは小町を向く。

「ええ、私は貴方を許すわ。・・・1つ教えてくれるかしら。両親が亡くなった原因は何故なのかしら?」レミリアが小町に聞く。

「貴方達の両親は病によって亡くなった。」小町が言う。

「病でね…。」レミリアが言う。

フランが小町を向く。

「私は勘違いしてたわ。てっきり貴方がパパとママを苦しめてたと思ってた。」フランが小町に言う。

「まあ、死神と言われてる位だからね。間違うのも仕方ないよ。」小町が言う。

「じゃあ、あたいは行くよ。」言い終えると小町は法廷を出た。

レミリアは皆の方を向く。

「皆、帰るわよ。」レミリアが言う。

「はい、紅魔館の主、レミリアお嬢様！。」皆が言う。フランまでも言う。

レミリアの顔が赤くなった。

「なんか恥ずかしいわ。」レミリアが言う。

「でも、悪くないわ。」

こうしてレミリアスカーレットは両親の遺志を受け継いだ。

現在の紅魔館。

「そんな過去があったんですね。」咲夜が泣きそうな顔で言う。

「ええ、そうよ私がこの紅魔館の主になるって思った時は本当にびっくりしたわ。」レミリアが言う。

咲夜がハンカチで目を拭く。

「似合ってますわお嬢様。・・・2つ聞きたいのですが、私にそっくりなメイドとは？」咲夜が聞く。

「それは貴方の曾祖母よ。」レミリアが言う。

「私の！！。」咲夜が驚いた。

「そうですか紅魔館のメイドをしてるのは私だけが始めてでは無かったのですね。」咲夜が言う。

「さて咲夜その写真渡してくれる？」レミリアが咲夜に言う。

「お嬢様。もう1つ教えて下さい。閻魔が白と言ったその理由を。」咲夜が言う。

「咲夜、もう答えは出てるじゃない。」レミリアが言う。

「お嬢様分かりませんけど?」咲夜が言う。

「教えてあげるわ、まずこの写真がそうよ。お父様はこの写真を撮る時にこの写真が親子の最高の愛を示す物にすると言う事で皆を写したのよ。」レミリアが言う。

「そういう事ですか。」咲夜が言う。

「そしてもう1つが私よ。」レミリアが言う。

「お嬢様ですか!」咲夜が言う。

「私が紅魔館の主になった事で外の世界に大きな力が出る事も無くなった。」レミリアが言う。

「咲夜、今度こそ写真を貰って良いかしら?」レミリアが言う。

咲夜から写真を受け取り自分の机に立て掛けた。

「お父様、お母様、私頑張っているわ、そして此れからも皆が楽しくいられる紅魔館にしていくわ・・・。」写真を見てレミリアスカーレットが言った。

了

（後書き）

小説を最後まで読んで頂きありがとうございます。この小説を読まれていて。文字等は読みやすかったでしょうか。次回作からはもっと字の間隔等を上手く使い。頑張って行きたいと思います。最後まで読んで頂きありがとうございます。

作者

SESE

RAGI

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5380y/

レミリア・スカーレットの日常談

2011年11月17日22時48分発行